

# 大学生の社会的スキルとコミュニケーション・スキルについて

——親子関係からの影響と青年期の発達課題への効果——

On social skills and communication skills of university students

——The influence of parent-child relations and the effect on adolescent development tasks——

池田 雄哉

Yuya IKEDA

(和歌山大学教育学研究科18期生)

菅 千索

Sensaku SUGA

(和歌山大学教育学部心理学教室)

2012年9月18日受理

## 問題と目的

社会的スキルとは、対人関係において、お互いのメッセージを適切に送受信することによって達成される学習可能な適応能力のことである。この社会的スキルを磨くということは、対人関係を円滑にすることであり、適応的な生き方をするために不可欠である。そこで、もっとも中心となるのは、対人コミュニケーションである。心の内部にメッセージが生じただけでは、それは相手には伝わらないので、伝えたいメッセージを特定の言葉や非言語的コミュニケーション(ジェスチャー、視線、距離の取り方、衣服など)に記号化する。これを特定のコミュニケーション・チャンネルにのせて、相手に発信する。そうすると、それを適切に受け取ることできた相手はチャンネルに表れた行動を解釈(解読)する。この循環過程が対人コミュニケーションなのであり、適応的な対人関係の基礎をなすものである。

メッセージを適切に記号化できる人は、一般に他の人のメッセージを解読する能力も高い。すなわち、メッセージを適切に送信する人は、うまく相手のメッセージを読みとることもできる。社会的スキルの特徴として、(1)目標指向的、(2)複数の行動、(3)時系列の構成、(4)具体的な状況と結びつき、(5)明瞭な行動単位による階層的構造、(6)学習可能である、(7)認知的に統制可能などが挙げられている(大坊、2005)。

コミュニケーション・スキルとは、個々の状況において適切な対人関係を形成・維持するための社会的な能力、すなわち狭義の社会的スキルということになる。このスキルという多義的な概念は、(1)文化・社会への適応において必要な能力であるストラテジー、(2)対人関係に主眼がおかれた社会性に関わる能力であるソーシャル・スキル、(3)言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であるコミュニケーション・スキルに分類される。そこではコミュニケーション・スキルを基礎とし、その上位にソーシャル・スキル、さらに上位にストラテジーが位置するという階層構造が仮定されている。また、これらのスキルは、

そのレベルに応じて文化や社会に通用する汎用的な能力か、それとも特有の状況に対する具体的な能力かという違いがあるという(藤本・大坊、2007)。

一方、近年、我が国においては少子化と核家族化が進み、急激に人間関係は希薄化している。物が溢れている反面、子どもたちの対人関係能力やソーシャル・スキルを育むことが困難になってきたのである。不登校、引きこもり、いじめ等の増加に歯止めがかからず、家庭内でさえ個室化し、地域社会ではお互いを知らず孤独である。親の養育力は低下に伴い、養育態度は二極化して、放任または過保護・過干渉といった養育態度が問題となっている(大鷹・菅原・熊谷、2009)。

親子関係の研究はレヴィの親が子に与える要因の研究を出発点とし、1970年代以降の「母子相互関係」「母子関係」から「父子関係」研究を経て「親としての発達」研究、そして「生涯発達」概念へと変遷してきた。しかしながら、青年期以降、成人期を含めて、心の変容についての臨床・実証研究はわずかであるという。このように親を対象とした「親から子、および親子相互作用」といった「親性」研究は、成人期における親子研究の主流である。逆に、数少ない親子関係研究は、「母子相互作用」「家族システム」「親の多重役割」「養育意識」「親の人生展望」「家族の個人化」「子を産む理由」「育児不安・育児ストレス」「母親意識」「父親意識」「夫婦関係」といったテーマに大別されている(戸田、2009)。

大鷹・菅原・熊谷(2009)は、母子関係と子どものソーシャル・スキル発達の阻害要因について、中学生と大学生を対象に調査を行ったが、中学生では子どもの損害回避傾向の高さと、母親の拒否的で厳格な養育態度に関連があるという。こどもが拒否的に育てられたと認識している場合は、ソーシャル・スキルが低いと予想されるのである。また親だけではなく、子どもに影響を与える存在がきょうだい関係である。岡崎・杉井(2004)の高校生を対象に行った調査では、きょうだいの関係性が信頼し受容し合う関係か、あるいは対等な関係であれば、より多くのソーシャル・スキルを獲

得していることが明らかになり、特に女子ではきょうだい間が分離的であればソーシャル・スキルが低くなるという結果になった。つまり、きょうだいとの調和的な関係が、青年のソーシャル・スキルの獲得や自尊感情の高低に影響を与えていることになる。

これまでの小学生や中学生を対象にした養育態度とソーシャル・スキルの研究では、母親の拒否的な養育態度は、子どものソーシャル・スキルの獲得を低下させると報告されている(戸ヶ崎・坂野、1997)。社会的スキルと親との養育態度の関連性については、その大半は児童を対象にしたものであり、青年期を対象とした研究はほとんどみあたらない。これは親子関係が直接的な関係にあるのは児童期まであって、青年期は親離れの時期であり、その段階でのパーソナリティへの影響は、親以外の要因によるところが大きいと考えられているためである(松元、1997)。青年期のソーシャル・スキルについて、杉浦・杉浦・杉浦(2007)は親の養育態度が大学生のソーシャルスキルに及ぼす影響について、大学生を対象に調査を行った結果、青年期のソーシャル・スキルの高さには、特に主たる養育者である母親の養育態度が大きな影響力をもっており、父親の養育態度は間接的に影響していることが明らかになっている。また、好ましい養育態度をもつ父親と母親において、夫婦関係が良好で、よくコミュニケーションのとれた温かい家庭は、ソーシャル・スキルの獲得を高めるという結果が得られている。このことから社会的スキルは幼少期から獲得され、獲得したスキルを用いて家族以外の対人関係を経験し、実際の他者との交わりを通して社会的スキルを修正・変化させさせているのである。その結果、さまざまな人たちと適切に交流し、効果的なコミュニケーションを保つための能力である社会的スキルが獲得できるのであろう。ゆえに、青年期にもっている社会的スキルの基盤は幼少期にあり、親の養育態度の影響を大きく受けていると考えられる。

学校適応と社会的スキルに関して、浅川・東・古川(2000)が中・高生を対象に行った研究では、中・高生が感じている社会的スキルの必要性和、彼らの学校適応感のあいだには、中程度の正の相関がみられ、両者の関連が認められている。人間関係を円滑に運ぶようなスキルを身につける必要性を感じている生徒ほど、学校生活も充実したものと感じているのである。もともと社会的スキルは、好ましい人間関係を築いたり維持していくことに用いられるものだとすれば、より適応的な個人ほど、その適応感を維持していくために、社会的スキルの重要性に対する認識が肯定的になるのであろう。また、青年期後期のコミュニケーションに関する研究において、畑野(2010)はコミュニケーションと自尊心、アイデンティティとの関連について大学生を対象に調査を行ったが、コミュニケーションと自

尊心に弱い相関があり、対人関係において、自らの意図を他者に伝えることができるという自信が、自らの目指すべきものを明確にし、また社会での適応感と関連しているという結果が得られている。

ところで適応とは、「個人と環境の関係」を示す概念であり(福島、1989)、「個人と環境の調和」として定義される。これに対して適応感とは、適応そのものを意味する概念ではないが、個人の適応の1指標としてとらえられものであり、適応感を規定するものは個人と環境との主観的な関係であると考えられている。

青年期の学校適応は、対人関係を築く能力である社会的スキルの視点から検討されることが多いという(河村、2003)。そこでは社会的スキルが高いほど、学校適応がよく、逆に社会的スキルが低いほど、学校適応の問題を抱えやすいと考えられている。その結果、学校適応の改善のためには、社会的スキルの獲得が必要であるとされているのである。すなわち社会的スキルの獲得は、学校への適応の問題における予防的援助の方策として位置づけられており、社会的スキルの獲得を狙いとするソーシャル・スキル・トレーニングは、学校への適応の問題に対して予防的効果があると信じられている。この背景には社会的スキルの獲得は、将来での適応につながるという前提があるが、その点についての詳しい検討はなされていない(河村、2003)。仮に、学校への適応の問題に対する社会的スキルの位置づけが妥当であり、社会的スキルの獲得を狙いとするソーシャル・スキル・トレーニングに予防効果があるならば、社会的スキルは将来における適応を予測できることになる(大久保・青柳、2005)。

これまでの研究では、青年期以前に獲得するソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルは、親の養育態度が関連していること示されてきた。そこでは親が受容的な養育態度であると、子どものソーシャル・スキルやコミュニケーション・スキルも高くなるという結果が報告されているが、多くはおもに小学生や中学生に関する研究においてであった。そこで本研究では、青年期にある大学生、短大生を対象としてソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルが、回想された養育態度と、どのような関係にあるか検討する。

学校適応にソーシャル・スキルやコミュニケーション・スキルが関連しているのは、いままでの数多くの研究で明らかになっているが、そこで議論されている要因はさまざまである。友人関係をひとつの要因として扱う研究もある。小学校では学級単位の行動が多く、学校適応は学級に適応しているかどうかといっても過言ではない。中学校や高校では小学校ほど学級適応は重要ではないと考えられるが、文化祭や体育祭など、学級単位の活動がないわけではない。では大学や短大といった学校ではどのような形態になっているのだら

うか。いままでの学校生活と違って学級といった概念はほぼ無いに等しく、自分で授業を選択し、単位を取得する。授業によっては、まったく誰とも話すことなく過ごすことは可能であろう。学業においては、小・中・高校よりも大学や短期大学では、コミュニケーション・スキルは必要とされないかもしれない、しかし、学業のみが学校生活ではなく、部活やサークル、アルバイトなど、いろいろなところでソーシャルスキルは必要不可欠である。

そこで本研究では、大学生および短期大学生を対象として、最初に年少期における親子関係(親の養育態度)が、青年期におけるソーシャル・スキルやコミュニケーション・スキルの高低とどのような関係にあるかについて検討する。つぎに、その青年期におけるソーシャル・スキルやコミュニケーション・スキルの高低が、青年期の発達課題であるアイデンティティ(自我同一性)の獲得や学校という環境への適応感、さらに自尊感情とどのような関係にあるかについて検討する。

## 方法

### 被験者：

大学生130名(教育系・工学系)、短大生99名(保育系)、合計229名であり、その内訳を表1に示す。

表1 被験者数の内訳

	保育系	教育系	工学系	合計
男子	0	37	51	88
女子	99	24	18	141
1年	50	38	39	127
2年	49	16	19	84
3年	0	5	9	14
4年	0	2	2	4
合計	99	61	69	229

### 質問紙：

#### (1)親子関係診断尺度(EICA)

辻岡・山本(1976、1978)によって開発されたもので、EICAと略記されることが多い。親子関係テスト(Children's Reports of Parental Behavior Inventory)の260項目を翻訳したものを出発項目として、因子的真実性の原理によって項目分析を行い、最終的に各下位尺度が10項目からなる合計40項目で尺度が構成された。小・中高生を中心とした親の養育態度を調べる質問紙であるが、年齢層を大学生に拡大して、回想によって施行することは可能であると判断した。回答は3件法で、1次因子尺度が「情緒的支持(ES)」「同一化(ID)」「統制(CO)」「自立性(AU)」、2次因子尺度が受容性(AO)対拒否性(RE)(ここでは「受容性」と表記する)、統制性(CO)対自律性(AU)(同「統制性」)である(辻岡、1978)。

#### (2)アイデンティティ尺度

日本の大学生の「モラトリアム心理」とアイデンティティの確立度との関連を検討するため下山(1992)によって開発された。4件法で「アイデンティティの確立(ここでは「確立」と表記する)」尺度10項目と、「アイデンティティの基礎(同「基礎」)」尺度10項目からなる。対象は、開発の目的に照らせば大学生ということになるが、思春期から成人期以降にまで広く使用が可能な尺度であろう。

#### (3)多次元自我同一性尺度

多次元的に同一性感覚を測定する自我同一性尺度であり、谷(1997a、1997b、1998、2001)によって開発された。谷によれば、従来の尺度には、エリクソンの記述との対応関係が明確でないという問題があり、下位概念の設定についても同じ問題が生じているという。そこで、エリクソンの自我同一性の概念を忠実に再現しようとして、精緻な手順で開発された尺度である。標準化は大学生で行われているため、本研究でも利用可能である。回答は7件法で下位尺度は自己斉一性・連続性(ここでは「連続性」と表記する)、対自的同一性(同「対自的」)、対他的同一性(同「対他的」)、心理社会的同一性(同「心理社会的」)、および、これらの全体(同「同一性合計」)からなる。

#### (4)KiSS-18

菊池(1998)が開発したもので、社会的スキルをどの程度まで身につけているか測定する。社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル(技能)」と定義される。Goldstein, *et al.*(1986)は、若者にとって必要な社会的スキルを大きく6種類に分類した。すなわち、①初歩的なスキル、②高度なスキル、③感情処理のスキル、④攻撃に代わるスキル、⑤ストレスを処理するスキル、⑥計画のスキルである。この分類にもとづいてGoldstein, *et al.* が作成したスキルのリストにもとづくものである。18項目からなる5件法で、下位尺度はなく合計点だけが算出される。

#### (5)コミュニケーション・スキル尺度(ENDCOREs)

言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技術であるコミュニケーション・スキルを測定する尺度で、藤本・大坊(2007)によって作成されている。具体的には、コミュニケーション・スキルを構成する「自己統制」「表現力」「読解力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」という6つの下位スキルが測定される。前者の3尺度(「自己統制」「表現力」「読解力」)は基本スキル、後者の3尺度(「自己主張」「他者受容」「関係調整」)は対人スキルにそれぞれ分類され、基本スキルよりも対人スキルの方がより高次のコミュニケーション・スキルとして位置づけられている。7件法で、下位尺度はそれぞれ4項目からなる。

#### (6)青年用適応感尺度

青年の適応感を個人-環境の適合性の視点から測定

する尺度であり大久保(2005)によって開発された。本尺度の測定する適応感とは「個人が環境と適合していると意識していること」である。対象は青年期全体である。30項目からなる5件法で、下位尺度は居心地の良さの感覚(ここでは「居心地のよさ」と表記する)、課題・目的の存在(同「課題」)、被信頼感・受容感(同「被信頼感」)、劣等感のなさ(同「劣等感のなさ」)である。

(7)自尊感情尺度

自尊感情とは、自己の能力や価値に関する評価的な感情または感覚をさす。本研究で使用するのは、Rosenberg(1965)により作成された自尊感情尺度をもとにした山本・松井・山成(1982)の邦訳版である。10項目からなる5件法で、合計点だけが算出される。

手続き：

調査時期は10月末で、大学別に集団式で授業中に行った。最初に研究への協力依頼およびプライバシー関連等の一般的な説明を行った後、フェイスシートを含めて9枚の質問紙を配り、それぞれに質問紙への回答に関する教示や注意事項をまとめて述べた上で回答してもらった、制限時間は課さなかったが、実際の所要時間は約30分であった。また質問紙はカウンターバランスをとるため、4パターン作成した。

結果と考察

本研究で使用した各尺度の平均と標準偏差を表2に示す。

1. 親子関係診断尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の相関分析

親子関係診断尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度との相関係数を表3に示す。

まず、親子関係診断尺度とKiSS-18についてみると、「同一化」で有意な傾向の相関、「情緒的支持」「受容性」「統制性」で有意な相関がみられたが、相関係数の絶対値は低く、親の養育態度とソーシャル・スキルに関連は認められなかった。

つぎに、親子関係診断尺度とコミュニケーション・スキル尺度との相関係数をみると、「同一化」と「表現力」に有意な傾向の相関、「同一化」と「自己主張」、「情緒的支持」と「表現力」「解読力」「他者受容」「関係調整」、また「受容性」は「自己統制」以外のすべての下位尺度と有意な相関があった。絶対値はあまり大きくはないが、「情緒的支持」および「受容性」と「表現力」に関連があり、親の養育態度を受容的に感じており、また情緒的な支持が高いと、表現する力も高くなる傾向があると考えられる。

表2 各測定変数の平均値(上段)と標準偏差(下段)

親子関係診断尺度	平均値		標準偏差		KiSS-18		青年用適応感尺度	KiSS-18			
	項目	平均	項目	標準	項目	標準		項目	標準		
親子関係診断尺度	自律性	12.07	アイ	23.08	コミュニケーション・スキル尺度	56.89	青年用適応感尺度	居心地のよさ	38.69		
		4.76	テイ	5.08		10.71		のよさ	8.19		
	統制	6.18	イデ	確立		26.58		自己統制	4.55	課題	26.38
		4.19				スケ			5.18		0.97
	同一化	8.07	多次元自我同一性尺度	連続性		23.55		表現力	4.00	被信頼感	16.47
		4.30				7.16			1.04		4.47
	情緒的支持	13.60		対自的		21.74		解読力	4.43	劣等感のなさ	20.28
		4.50				6.25			1.11		4.39
	受容性	21.67		対他的		20.35		自己主張	3.98	自尊感情尺度	30.18
		7.68				6.40			1.04		6.87
統制性	18.26	心理社会的		21.05	他者受容	5.02					
	5.52			5.43		0.94					
		同一性		86.69	関係調整	4.63					
		合計		20.44	0.96						

表3 親子関係診断尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の相関係数

	親子関係診断尺度						
	自律性	統制	同一化	情緒的支持	受容性	統制性	
KiSS-18	0.079	0.082	0.117 †	0.184 **	0.173 **	0.131 *	
コミュニケーション・スキル尺度	自己統制	0.102	-0.048	0.068	0.101	0.097	0.051
	表現力	0.094	0.013	0.110 †	0.266 ***	0.217 **	0.091
	解読力	0.083	-0.003	0.100	0.152 *	0.145 *	0.069
	自己主張	0.018	0.053	0.145 *	0.106	0.143 *	0.055
	他者受容	0.042	0.024	0.096	0.153 *	0.144 *	0.055
関係調整	0.074	0.037	0.104	0.153 *	0.148 *	0.093	

注：有意確率は\*\*\*:p < 0.001、\*\* :p < 0.01、\* :p < 0.05、† :p < 0.10。

2. アイデンティティ尺度、多次元自我同一性、青年適応感尺度、自尊感情尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の相関分析

アイデンティティ尺度、多次元自我同一性、青年適応感尺度、自尊感情尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度との相関係数を表4に示す。

まず、アイデンティティ尺度、多次元自我同一性、青年適応感尺度、自尊感情尺度とKiSS-18との関連についてみると、アイデンティティ尺度の「確立」と「基礎」に負の有意な相関、また多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度、自尊感情尺度はすべての下位尺度とそれぞれ正の有意な相関があった。アイデンティティ尺度と多次元自我同一性尺度はどの下位尺度とも相関が高く、また青年適応感尺度は「被信頼感」および自尊感情尺度とも比較的強い関連が認められた。

つぎに、アイデンティティ尺度、多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度、自尊感情尺度とコミュニケーション・スキル尺度との関連についてみると、アイデンティティ尺度の「確立」と「基礎」に負の有意な相関があった。また青年適応感尺度の「被信頼感」と他

者受容以外のすべての下位尺度、多次元自我同一性尺度のすべての下位尺度と同一性合計、自尊感情尺度にそれぞれ正の有意な相関があった。絶対値は高くはないものの青年適応感尺度の「被信頼感」と「他者受容」以外のすべての下位尺度に相関があり、また絶対値が高いものは、アイデンティティ尺度の「確立」とコミュニケーション・スキル尺度の「自己主張」、多次元自我同一性尺度の「連続性」と「表現力」、自尊感情尺度であった。

3. 親子関係診断尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の重回帰分析

これらの変数間での複合的な相関関係を明らかにするために、KiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の各下位尺度を目的変数、親子関係診断尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。ただし、1次因子尺度の和として求められる2次因子尺度の「受容性」と「統制性」は独立変数に含めていない。分析した結果、重相関係数が有意であったものを表5に示す。

KiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の「表現力」「解読力」「他者受容」「関係調整」において

表4 アイデンティティ尺度・多次元自我同一性尺度・青年適応感尺度・自尊感情尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の相関係数

		アイデンティティ尺度				多次元自我同一性尺度							
		確立		基礎		連続性		対自的		対他的		心理社会的	
KiSS-18		-0.566	***	-0.484	***	0.434	***	0.446	***	0.404	***	0.512	***
ン コ ミ ニ ケ ー シ ョ ン ・ ス キ ル 尺 度	自己統制	-0.375	***	-0.236	***	0.262	***	0.248	***	0.228	***	0.365	***
	表現力	-0.452	***	-0.390	***	0.416	***	0.244	***	0.343	***	0.397	***
	解読力	-0.410	***	-0.290	***	0.273	***	0.211	**	0.181	**	0.318	***
	自己主張	-0.495	***	-0.393	***	0.310	***	0.313	***	0.224	**	0.404	***
	他者受容	-0.291	***	-0.157	*	0.132	*	0.163	*	0.151	*	0.266	***
	関係調整	-0.402	***	-0.306	***	0.279	***	0.244	***	0.229	***	0.390	***
						青年用適応感尺度						自尊感情尺度	
		同一性合計		居心地のよさ		課題		被信頼感		劣等感のなさ			
KiSS-18		0.527	***	0.364	***	0.281	***	0.446	***	0.340	***	0.411	***
ン コ ミ ニ ケ ー シ ョ ン ・ ス キ ル 尺 度	自己統制	0.288	***	0.270	***	0.205	**	0.199	**	0.306	***	0.341	***
	表現力	0.393	***	0.318	***	0.237	***	0.305	***	0.343	***	0.414	***
	解読力	0.286	***	0.296	***	0.262	***	0.256	***	0.364	***	0.395	***
	自己主張	0.376	***	0.235	***	0.195	**	0.345	***	0.296	***	0.464	***
	他者受容	0.219	**	0.289	***	0.230	***	0.100		0.266	***	0.200	**
	関係調整	0.302	***	0.348	***	0.218	**	0.256	**	0.321	***	0.321	***

注：有意確率は\*\*\*:p < 0.001、\*\* :p < 0.01、\* :p < 0.05、† :p < 0.10。

表5 KiSS-18とコミュニケーション・スキル尺度を目的変数、親子関係診断尺度を説明変数とする重回帰分析の結果

目的変数	重相関係数 R	自由度調整済 R 自乗	標準偏回帰係数 β						
			親子関係診断尺度						
			情緒的支持	同一化	自律性	統制			
KiSS-18	0.184	**	0.030	0.184	**				
ケ ー シ ョ ン ・ ス キ ル 尺 度	表現力	0.266	***	0.067	0.266	***			
	解読力	0.152	*	0.019	0.152	*			
	自己主張	0.145	*	0.017			0.145	*	
	他者受容	0.153	*	0.019	0.153	*			
	関係調整	0.153	*	0.019	0.153	*			

注：有意確率は\*\*\*:p < 0.001、\*\* :p < 0.01、\* :p < 0.05、† :p < 0.10。

は、また親子関係診断尺度の「情緒的支持」、コミュニケーション・スキル尺度の「自己主張」においては、親子関係診断尺度の「同一化」で標準偏回帰係数( $\beta$ )が有意であった。しかしながら、複数の標準偏回帰係数が有意となるものはなかったため、相関係数による分析結果を超えるものではないと判断される。

#### 4. アイデンティティ尺度、多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度、自尊感情尺度とKiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の重回帰分析

アイデンティティ尺度、多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度の各下位尺度、自尊感情尺度を目的変数、KiSS-18およびコミュニケーション・スキル尺度の各下位尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、重相関係数が有意であったものを表6に示す。

アイデンティティ尺度の「確立」と「基礎」においては、KiSS-18とコミュニケーション・スキル尺度の「表現力」で標準偏回帰係数が有意で、係数はどちらも負でKiSS-18の絶対値の方が高かった。

多次元自我同一性尺度の「連続性」においては、KiSS-18とコミュニケーション・スキル尺度の「表現力」と「他者受容」が有意で、係数はKiSS-18の絶対値は最大、また「他者受容」は負であった。また「対自的」においては、KiSS-18のみが有意、「対他的」においては、KiSS-18、「表現力」「自己主張」が有意であり、やはりKiSS-18の絶対値が最大、「自己主張」は負であった。「心理社会的」においては、KiSS-18と「自己統制」が有意であり、KiSS-18の方が高い数値となった。さらに同一性合計においては、KiSS-18と「表現力」が有意であり、KiSS-18の方が数値は高かった。

青年適応感尺度の「居心地のよさ」については、KiSS-18とコミュニケーション・スキル尺度の「関係調整」が有意で、KiSS-18の方が高い数値となった。「課題」においては、KiSS-18と「解読力」が有意であり、KiSS-18の方が数値は高かった。「被信頼感」においては、

KiSS-18と「他者受容」が有意であり、KiSS-18の方が数値は高く、また「他者受容」は負であった。「劣等感のなさ」においては、KiSS-18と「解読力」が有意であり、「解読力」の方が数値は高かった。

自尊感情尺度においては、「自己統制」と「自己主張」が有意であり、「自己主張」の方が数値は高かった。以上を整理すると以下のようなことがいえる。

アイデンティティ尺度の「確立」と「基礎」では、KiSS-18と「表現力」で標準偏回帰係数はどちらも負であり、KiSS-18ならびに「表現力」の得点が低いほど、アイデンティティ尺度の2つ下位尺度の得点が高くなる傾向があるといえる。

多次元自我同一性尺度の「連続性」では、KiSS-18と「表現力」は正、「他者受容」は負であり、KiSS-18ならびに「表現力」の得点が高く、かつ「他者受容」の得点が低いほど、「連続性」の得点は高くなる傾向があるといえる。「対他的」では、KiSS-18と「表現力」は正、「自己主張」は負であり、KiSS-18ならびに「表現力」が高く、かつ「自己主張」が低いほど、「対他的」の得点は高くなる傾向があるといえる。「心理社会的」では、KiSS-18と「自己統制」はどちらも正であり、KiSS-18ならびに「自己統制」の得点が高いほど、「心理社会的」の得点は高くなる傾向があるといえる。「同一性合計」では、KiSS-18と「表現力」はどちらも正であり、KiSS-18ならびに「表現力」の得点が高くなるほど、「同一性合計」の得点が高くなる傾向があるといえる。

青年適応感尺度の「居心地のよさ」では、KiSS-18と「関係調整」はどちらも正であり、KiSS-18ならびに「関係調整」の得点が高くなるほど、「居心地のよさ」の得点は高くなる傾向があるといえる。「被信頼感」では、KiSS-18は正、「他者受容」は負であり、KiSS-18の得点が高く、かつ他者受容の得点が低いほど、「被信頼感」の得点は高くなる傾向があるといえる。「劣等感

表6 アイデンティティ尺度・多次元自我同一性尺度・青年適応感尺度・自尊感情尺度を目的変数、KiSS-18とコミュニケーション・スキル尺度を説明変数とする重回帰分析の結果

		重相関係数 $R$	自由度調整済 $R$ 自乗	標準偏回帰係数 $\beta$					
				KiSS-18	コミュニケーション・スキル尺度				
					自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容
アイデンティティ尺度	確立	0.590 ***	0.342	-0.566 ***		-0.201 **			
	基礎	0.506 ***	0.249	-0.484 ***		-0.177 *			
多次元自我同一性尺度	連続性	0.497 **	0.237	0.434 ***		0.254 ***		-0.138 *	
	対自的	0.446 ***	0.196	0.446 ***					
	対他的	0.449 *	0.191	0.404 ***		0.172 *		-0.200 *	
	心理社会的	0.530 *	0.275	0.512 ***	0.158 *				
	同一性合計	0.541 *	0.287	0.527 ***		0.146 *			
青年用適応感尺度	居心地の良さ	0.396 *	0.149	0.364 ***					0.198 *
	課題	0.311 *	0.089	0.281 ***		0.157 *			
	被信頼感	0.461 *	0.206	0.446 ***				-0.136 *	
	劣等感のなさ	0.403 **	0.155	0.205 **		0.364 ***			
自尊感情尺度					0.178 **			0.464 ***	

注：有意確率は\*\*\*:  $p < 0.001$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$ , †:  $p < 0.10$ 。

のなさ」では、KiSS-18と「読解力」はどちらも正であり、KiSS-18ならびに「読解力」の得点が高くなるほど、「劣等感のなさ」の得点も高くなる傾向があるといえる。

自尊感情尺度では、「自己統制」と「自己主張」はどちらも正であり、「自己統制」と「自己主張」の得点が高くなるほど、「自尊感情尺度」の得点も高くなる傾向があるといえる。

## まとめ

まず、親子関係診断尺度とKiSS-18についてみると、相関係数の幾つかは有意であったが、絶対値は低かったため、親の養育態度とソーシャル・スキルに関連はほとんどないと判断される。つぎに、親子関係診断尺度とコミュニケーション・スキル尺度についてみると、相関係数の絶対値はあまり高くはないものの、「情緒的支持」および「受容性」と「表現力」とに関連があり、養育態度を受容的に感じ、情緒的な支持が高いと、表現する力も高くなると判断される。

アイデンティティ尺度、多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度、自尊感情尺度とKiSS-18について見た場合、アイデンティティ尺度と多次元自我同一性尺度は、どの下位尺度とも相関が高く、青年適応感尺度の「被信頼感」および自尊感情尺度で比較的強い関連が認められた。アイデンティティ尺度、多次元自我同一性尺度、青年適応感尺度、自尊感情尺度とコミュニケーション・スキル尺度との相関係数について見ると、絶対値が高いものはアイデンティティ尺度の「確立」と「自己主張」、多次元自我同一性尺度の「連続性」と「表現力」、自尊感情尺度であり、ある程度の関連が見られた。多次元自我同一性尺度の「連続性」と「表現力」は、自分というものの時間的連続性をしっかり確立していれば、人とのやりとりの中で表現力が高くなると解釈される。また自尊感情尺度と「自己主張」は、自分をある程度価値ある人間と考えられれば、「自己主張」もそれなりに可能であるといえる。KiSS-18はアイデンティティ尺度と多次元自我同一性尺度とも相関が高く、自我同一性の発達には他者との関わりが必要である推測される。青年適応感尺度との関連は「被信頼感」において見られ、信頼を受けるのには他人との関わりが不可欠である。

最後に、本研究では主たる養育者の養育態度を測定するために、青年本人による回想を求めた。そのため現在における主たる養育者との関係に影響されている可能性があり、実際の過去の養育態度とは必ずしも一致しない可能性が残る。今後は学生本人と養育者の双方からの情報収集が必要であろう。

## 要約

本研究では、大学生130名、短大生99名に質問紙調査

を行い、最初に、ソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルが、親の養育態度とどのような関係にあるか検討した。その結果、親の養育態度とソーシャル・スキルおよびコミュニケーション・スキルの関連は認められなかった。

つぎに、過去に獲得されたソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルが、青年期の課題であるアイデンティティの確立、所属学校への適応感、自尊感情とどのような関係にあるかについて検討した。その結果、ソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルは、アイデンティティ尺度、多次元自我同一性、青年適応感尺度、自尊感情尺度との相関が高かった。ソーシャル・スキルとコミュニケーション・スキルが、アイデンティティの発達、所属学校への適応感、自尊感情に影響すると判断された。

## 引用文献

- 浅川潔司・東 由佳・古川雅文 2001. 青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究. 兵庫教育大学研究紀要, 第1分冊, 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育, 21, 99-103.
- 大坊都夫 2005. 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション. ナカニシヤ出版.
- 藤本 学・大坊都夫 2007. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 福島 章 1989. 性格と適応. 性格心理学講座3: 適応と不適応. 金子書房.
- Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., & Klein, P. 1986. The adolescent: social skill training through structured learning. In G. Cartledge, & J. F. Milburn (Eds.), *Teaching Social Skills to Children*. Pergamon Press.
- 畑野 快 2010. 青年期後期におけるコミュニケーションに対する自信とアイデンティティとの関連性. 教育心理学研究, 58, 404-413.
- 河村茂雄 2003. 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討. カウンセリング研究, 36, 121-128.
- 菊池章夫 1988. 思いやりを科学する. 川島書店.
- 松元泰儀 1997. 人間関係の変化, 親子関係. 加藤隆勝・高木秀明編. 青年心理学概論. 誠心書房.
- 岡崎有理子・杉井順子 2004. 青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響—最も身近に感じるきょうだいとのダイアドな関係性を分析単位として—. 奈良教育大学紀要第53巻第1号(人文・社会).
- 大久保智生 2005. 青年の学校への適応感とその規定要因—青年適応感尺度の作成と学校別の検討—. 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大久保智生・青柳 肇 2005. 大学新入生の適応に関する研究. 人間科学研究, 18, 207-213.
- 大鷹 円・菅原正和・熊谷 賢 2009. 母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 8, 119-129.
- Rosenberg, M. 1965. *Society and adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 下山晴彦 1992. 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—ア

- イデンティティの発達との関連で. 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 杉浦浩子・杉浦文香・杉浦春雄 2007. 親の養育態度が大学生のソーシャルスキルに及ぼす影響. 健康レクリエーション研究論文集/実践報告書, **4**, 15-27.
- 谷 冬彦 1997a. 自我同一性(第V段階)尺度の作成(1)-下位概念設定および項目選定に関する予備的研究. 日本心理学会第61回大会発表論文集, 287.
- 谷 冬彦 1997b. 自我同一性(第V段階)尺度の作成(2)-因子分析および信頼性の検討. 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 207.
- 谷 冬彦 1998. 自我同一性(第V段階)尺度の作成(3)-妥当性の検討. 日本心理学会第62回大会発表論文集, 263.
- 谷 冬彦 2001. 青年期における同一性の感覚の構造-多次元自我同一性(MEIS)の作成. 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 戸田まり 2009. 親子関係研究の視座, 教育心理学年報, **48**, 173-181.

- 戸ヶ崎素子・坂野雄二 1997. 母親の養育態度が小学生の社会スキルと学校適応に及ぼす影響. 教育心理学研究, **45**, 173-182.
- 辻岡美延 1976. 親子関係診断尺度EICA実施手引き. 日本心理テスト研究所.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976. 親子関係診断尺度EICAの作成. 関西大学社会学部紀要, **7**, 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 1978. 親子関係の種類-親子関係診断尺度EICA-. 教育心理学研究, **26**, 19-28.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982. 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

#### 付記

この論文は菅の指導の下で池田が提出(2012年1月)した修士論文(和歌山大学大学院教育学研究科・学校教育専攻・学校教育専修)の一部を書き改めたものである。